

自身の作品と向き合う『版画』の授業

【前置き】

何十年前、自身の版画の授業は断片的な印象として残っています。まずは、単色インクの独特な匂いと糸を引くような粘りで、ローラーを動かすと「ヌチャヌチャ」音がしたこと。2人で慎重に角を合わせて画用紙を置こうとした時、手が離れて曲がってしまい言い合いになったこと。石鹸で水洗いしても、なかなかとれないインクのしつこいこと。(一番印象に残っているのは、手の汚れならまだしも、白い体操服のなぜこんな所にとという場所にインクが付き、『版画の思い出』をずっと残している者がいたこと。)

つまるところ、『版画』そのものの楽しさや、版木を掘り印刷したことで出来上がった作品の充実感というより、道具や制作過程の印象の方が強いということです。

【現状】

現在、日吉小で4年生～6年生までが取り組んでいる版画は、単色刷りをして作品完成という、過去のレベルを大きく上回るものです。

4年生は単色で印刷後、紙の裏から色をつける『彩色木版画』、5年生は彫り込んだ小さな版木に配色、配置まで考えて作成する『繰り返し木版画』、そして6年生は、水彩絵の具を使い、黒の画用紙の上に塗り重ねる『一版多色刷り木版画』と、どの学年も奥深さを感じる作品に仕上がる気がします。

図工担当の先生に聞いたところ、日吉小で多色刷り版画を始めたのは、12～13年前からだそうです。単色から発展させたり、多色で塗ったり、塗り重ねたりといった、彫りと塗りのそれぞれに興味深さがある現在の『版画』の授業は、本質的な面白さ、充実感が味わえると思いました。

【実際】

本日(2/16)、6年生の図工の授業(『一版多色刷り木版画制作』)を参観しました。一人一人が自分のやるべきことに一心に取り組む姿が見られました。自分の作品と向き合い、よりよくするために全体や部分を見ながら配色を考える、実際に色を塗り印刷してみる、という繰り返しによって、こだわりのある作品に仕上がっていくと思いました。完成作品が楽しみです。

